の至りではあるが、それでも自分なりに、学部生が歴史の面白さと意義とを感じられるようにと事前に精一杯考えを巡らせたことを思い出す。私自身にとっても、歴史とは何か、大学で歴史を学ぶことの意味とは何か、というようなことを考え直すよいきっかけになった。そして今回、聞き手としてこの講演会に参加して若手研究者の情熱的な語りに接することによって、改めて刺激を受けたように思う。その意味で、学生だけでなく、話し手の若手研究者、そして専任教員のそれぞれにとっても有意義な催しとして、今後もこの講演会が続いていくことを期待したい。

末筆ながら、開催にあたって貴重な授業時間の一部を提供してくださった先生方、ならびに、当日の運営に協力していただいた各コース助教・助手の方々に感謝の意を申し述べたい。

〈第一回〉

中世人の生活を探る

―中世の家計簿から―

似鳥雄一

私は日本中世史学という学問の「面白さ」に焦点をしぼってお話することとした。歴史学の面白さは何かといえば、それは当時の人々がどのように生きていたかを史料から掘り起こすことである。史料といってもいろいろあるが、「歴史学」といった場合にはまず紙を媒体とした文献史料をあつかうことになる。そこでどのような文献史料をあつかうかが大きな問題となるが、ここで紹介したいのは、この業界では敬遠されがちな帳簿史料である。一見すると退屈な数値の羅列にすぎない帳簿史料を題材に、そこから垣間みえる中世人の生活のあり方を探ってみたい。

しばらく前に巷では『武士の家計簿』（磯田道史著、新潮社、二〇〇三年）という幕末～明治の帳簿史料をあつかった本が話題になったが、中世にも家計簿と呼べるような史料がなくはない。今回紹介するのは家族という意味での「イエ」の家計簿ではないが、中世では荘園のことを「荘家」、寺院のことを「寺家」といったりするので、そこで作成された収入と支出の帳簿を「中世の家計簿」と呼んでおきたい。

まず史料一は、備中国新見荘という荘園の家計簿である。この荘園は現在の自治体でいえば岡山県新見市にあり、岡山駅から特急で一時間、中国山地の中央、もっとも奥深いところに位置する。京都の五重塔で有名な東寺が領主となっているが、室町時代になると荘園現地の経営は代官に任せており、その代官が応永八～九年（一四〇一～〇二）の収支について作成したのが史料一である。なお史料にみえる銭一文はごく大雑把にいって現在の百円程度と考えてもらいたい。一貫文というのはその千倍なので十万円程度ということになる。

支出費目をみていくと、生活必需品の購

入も確かにあるが、何といっても目立つのは酒・肴の購入頻度の高さである。これらは何のためかというと、代官が着任した時の周辺の有力者へのあいさつと思われる。つまりこれは現地での接待の記録でもあるのである。彼らが酒の肴として口にした物も興味深く、豆腐や索麺、タヌキ・ムジナ・ウサギのような獣類、また新見荘は海からは非常に離れているにもかかわらず鯛・昆布・和布（わかめ）といった海産物も流通していたらしい。彼らが買い物をしていた市場が活況を呈していたことが想像される。

しかし彼ら代官はこれだけの接待費を経費として計上しておきながら、実は所定額の年貢を東寺に納めることができていなかったことが別の史料からわかる。十分な業績をあげてもいないのに接待まみれで金ばかりかかるというのは、最近ではあまり聞かなくなった気がするが、雇った側からすれば迷惑な話である。

次にみる史料二は、文安二～三年（一四四五～四六）の東寺の内部での収支状況に関する帳簿であり、いわば寺院の家計簿である。ただし東寺全体ではなく、東寺の中に置かれた「五方」という渉外部門の収支を記したもので、室町幕府の要人に対する交際費・接待費の記録が多くみられる。

最初に記載されているのは収入であるが、そのうち借金がかなりの割合を占めている。それら借金の返済状況は後半部分に記されているが、金利は毎月四～五％（年率四八～六〇％）で約三〇貫文の利子を支払っている。ちなみに現在の利息制限法では年率一五～二〇％を上限としているので、現代からみれば相当な高利貸しということになるが、当時の金利としては標準的であり決して珍しくない。彼ら寺院の収入は年貢に依存しており、それが納入される季節は決まっているので、その間の時期は借金をしてでも幕府要人との交際を維持しているわけである。

次いで支出をみると、東寺の交際相手のうち有名人としては、のちに応仁の乱でそれぞれ西軍・東軍の総大将になる山名持豊（宗全）、細川勝元といった名前がみえる。その山名持豊に東寺は「五色」なるものを贈っているが、これは瓜のことで、夏場の贈り物として重宝された。ちょうど現代でお中元にスイカ・メロンというのと感覚的に通じている。一方、秋の贈り物として注目されるのが松茸である。松茸の贈答には毎年々々かなり大きな金額が費やされており、これも現代と変わらない中世人の松茸に対する強い愛着を感じることができる。

以上、まとまりに欠けるつたない講演であったが、中世人の生活を史料から探る面白さについて片鱗は伝えられたかと思う。歴史学に携わる上でもっとも重要なことは、まずは史料を正しく読み解くこと、そして史料から得た情報をもとに想像力を働かせることだと私は思っている。私に限らず今日の講演会によって想像力を刺激された人がいて、歴史学の門を叩いてくれるようなことがあれば幸いに思う。